

# スーパーヴィーニエンス・テーゼと 存在論的コミットメント ー物理主義の存在論的含意の把握に向けてー

井頭昌彦

## Abstract

Although physicalism is usually understood as an ontological thesis, it is not clear that what implications this position has on the matter of ontology expressed by the question “What there is?” In this paper, I begin with Quine’s “indispensability argument,” and abstract from it a framework for sorting ontological positions. Then, I try to locate supervenience thesis, which is an important part of physicalism, within the framework above. One conclusion of this paper is that supervenience thesis works, neither as a direct assertion on what there is nor as an assertion on the criterion of ontological commitment we should adopt, but as an assertion on the class of the sentences from which we should extract ontology.

## 第1節 イン트로ダクション

現在、心の哲学などの領域において、多くの論者が存在論上の立場としての物理主義を支持している。この傾向は自然主義の立場を採用するものに特に顕著であり、近年の自然主義論においては、自然主義を存在論的自然主義と認識論的自然主義の二つに区分した上で、前者を物理主義と同一視する、という理解が主流となっている。では、物理主義とは具体的にはどのような立場なのであろうか？この立場の内容と由来については、[Crane and Mellor, 1990] および [Loewer, 2001] の一節がその基本的なイメージをわかりやすく示している。

多くの哲学者は物理科学（physical science）によって成し遂げられた進歩に強く印象づけられている。このことは彼らの存在論的見解に対して特に大きな影響を及ぼしてきた。すなわち、このことは彼らの多くを物理主義者にしてきたのである。物理主義者は全てのものは物理的であると信じている。より正確に言えば、全ての存在者、性質、関係、そして事実は物理学ないしは他の物理科学によって研究されるものだ、と彼らは信じているのである。しばしば引用される「物理学がある、そして切手収集がある」というラザフォードの発言の背後にある精神に、全ての物理主義者が同意するわけではないかもしれない。しかし、彼らはみな、物理科学にユニークな存在論的権威を認めている。すなわち、何が存在するのかについて我々に教えてくれるという権威を認めているのである。（Crane and Mellor, 1990, 185）

唯物論は、全ての事実、特に全ての心的事実が成立するのは物質の時空的な配置およびその性質のおかげである、と述べる。これは、〈世界は物質からなっている〉ということが科学によって主張されていると考えられていた限りにおいては、パトナムの言うように「科学の範囲内における形而上学（metaphysics within the bounds of science）」<sup>1</sup>であった。今世紀に入って物理学者達は、世界には物質以外のものがあるということを知り、また、物質というのはいずれにせよそれがそうあると思われていたようなものとはかなり異なっている、ということを知ってきた。この理由により、〈形而上学は科学から情報を得るべきだ〉と考える多くの哲学者達は、唯物論に換えて物理主義を提唱する。物理主義が主張するのは、全ての事実が成立するのは完成された基礎的物理学——それがどのようなものとなるにせよ——の基礎的な存在者と性質の配置のおかげである、ということである。（Loewer, 2001, 37）

しかし、ここで「すべての事実は物理的事実である」という仕方で提示されている物理主義の〈基本的イメージ〉は、わかりやすいものではあるが、哲学的な議論に耐えるような定式化ではない。特に、この物理主義という立場が存在論的テーゼとしてどのように働くのか、「何があるのか」という存在論的問題に対してどのような含意を持っているか、という点についてはさらに詳細な分節化が必要となるであろう。そこで本論では、「物理主義という立場は存在論的論争においてどのように機能するか」という問題をより明確に理解するための一助として、物理主義の立場を構成する重要な部分として多くの論者が取りあげる「スーパーヴィーニエンス・テーゼ」に焦点を当て、このテーゼが存在論的論争においてどのように機能しているかを見定めていくことにする。以下、本論における議論の構成を示しておこう。まず、第2節では、抽象的な数学的対象に対する存在論的コミットメントを導

出するクワインの議論を参照しながら、存在論的論争を整理するための基本構図を提示する。つづく第3節では、スーパーヴィーニエンス・テーゼおよびそれが物理主義という立場のうちで果たしている役割について説明した上で、これを第2節で提示された基本構図のうちに位置づけることでその存在論的な役割を明確にする。第4節は本論における議論のまとめである。

## 第2節 存在論的論争とそれを整理する基本的枠組み

パトナムによれば、存在論という領域が「分析哲学者にとってのまともな主題」(Putnam, 2004, 78)になったのは、クワインの論文「何があるのかについて」(Quine, 1953)が公にされて以降のことである。そして、実際、この論文において展開された分析は、存在論を巡る現代の論争において大きな影響を及ぼしてきた。しかし、その一方でクワインの見解が現代の存在論者たちの標準的見解とはなっていないことも事実である。そこで本節では、クワインの議論を取り上げつつ、それに対する代案を参照することでクワイン特有の見解を捨象し、存在論的論争を整理するためのより一般的な枠組みを抽出していくことにする。

論文「何があるのかについて」の中でクワインは〈ある文を真として受け入れる際にどのような対象の存在を引き受けねばならないか〉を示す「存在論的コミットメントの規準」についての一つの考え方を提示したのだが、そのエッセンスは次の二点に要約されうる。

- (1) 真と見なされている文の表層的な文法構造を重視せず、記述への置き換えによって単称名辞を除去した量化文の形に変形してから存在論的コミットメントを引き出す。
- (2) ある文や理論を真と見なす人がコミットしなければならない存在者を「その文や理論を真にするために不可欠な存在者」と見なす(不可欠性論証)。

さて、こういった考えのもとで実際に存在論的主張が導きだされる具体的な事例としては、抽象的な数学的对象への存在論的コミットメントを導出する議論を挙げることができる。この事例は〈クワインの見解は現代の存在論的論争における一つの基礎となりつつも様々な代案によって相対化されている〉という現状を理解するための格好の材料となるので、以下ではこの議論をステップごとに検討していくことにしよう。(抽象的对象に対するコミットメントは避けられない)というクワインの結論が導かれる道筋は以下のようなものである。

1. ある文を真と見なすものは、そのことによって何らかの存在論的コ

ミットメントを引き受けることになる。

2. 我々は物理学や化学を含む我々の科学の総体を真と見なしている。
3. 物理学や化学の一部は数学を必須の部分として含んでいる。
4. 真と見なされている文から存在論的コミットメントを引き出す手続きとしてクワインが採用するのは「不可欠性論証」である（不可欠性のチェックは、真と見なされている文を〈単称名辞を除去した量化文〉の形に変形した上で行われる）。
5. 数学の諸文が真であるためには抽象的な数学的対象の存在が不可欠である。

結論：それゆえ、我々はこういった抽象的対象に対する存在論的コミットメントを引き受けねばならない。

さて、既に述べたように、こういったクワインの議論は現代における存在論的議論の基礎を形成したものであるが、その一方でこの議論に対しては様々な角度から代案ないし反論が提出されており、存在論を巡る現代の論争状況を複雑化させている。まず、5のステップに対しては、数学的言明を真として受け入れるためには必ずしも数やクラスといった数学的対象の存在にコミットする必要はない、とする反論がありうる。たとえば、パトナムによれば「数学における存在についての語りは、可能性についての語り——何らかの形而上学的な意味での『可能性』ではなく数学的必然性、すなわち我々が数学それ自体のうちから理解する可能性という意味での可能性——に置き換えることができる」（Putnam, 2004, 67）のであり、したがって、数学的言明の真理性を確保するために数やクラスといった数学的対象を存在者として受け入れる必要は必ずしもない、とされる。<sup>2</sup>

4のステップに関していえば、B.ヘイルやC.ライトらに代表される「新フレーゲ主義的アプローチ」と呼ばれる代案が存在する（これはしばしば、不可欠性論証に依拠するクワイン主義的アプローチと並ぶ現代存在論における二大潮流の一つとされる）。この立場によれば、存在論の導出は、量化文への書き換えを介して行われる不可欠性論証ではなく、単称名辞という文法学的概念を経由して行われる。例として「ペガサスは羽を持つ」という文が真として受け入れられているような場面を想定しよう。クワインの考えに従えば、この文は「 $\exists x (x \text{ is pegasusize and } x \text{ has feather})$ 」という単称名辞を除去した量化文の形に書き直され、この文を成立させる存在者（すなわち「羽を持ったペガサス」）が要請されることになる。他方、新フレーゲ主義の考えにおいても、この場面ではペガサスは存在者の目録に数え入れられるのだが、その理由は、「ペガサス」が単称名辞だから、というものなのであ

る<sup>3</sup>。このアプローチが示しているのは、存在論的コミットメントの規準には、単称名辞を除去した量化文へのパラフレーズに依拠するクワイン流の不可欠性論証以外のものも存在する、ということである。

3のステップについては、H.フィールドが提示する「物理学にとって数学は除去可能な道具にすぎない」とする唯名論的プログラムが一つの代案となりうる。<sup>4</sup>フィールドは、まず、我々は現在の科学理論に対して唯名論的に受け入れ可能な代替理論を構築することができる、という見解を示唆する（この見解を支持する事例として、フィールドは数学的対象に対するコミットメントを持たないような仕方でも構成されたニュートンの重力理論の1バージョンを提示する）。次に、フィールドは、そのような唯名論的な理論に数学的理論を付加したとしても、ある文が元々の理論の定理でなかったならばその文は数学的理論を付加された新たな理論においても定理になることはない、と論ずる。このようにしてフィールドは、物理学から数学を切り離すことが可能であること、および、そのことによって物理学の実質的な内容が変化しないことを主張する。こういったフィールドのプログラムが本論の議論の文脈において有している意義は、数学的理論が抽象的な数学的対象の存在にコミットしていることを認めたとしても、そういった数学的理論は我々の受け入れている「科学の総体」にとって必須のものではないと主張することによって、抽象的な数学的対象へのコミットメントを回避する路線がありうる、ということを示す点にある。

2のステップに対してもいくつかの代替案が提示されている。その一つは、存在論的コミットメントを持つのは科学の総体ではなくその一部にすぎない、とする議論である。P.マディは、実際の科学者たちは受け入れられている我々の最善の理論の全てを真と見なしているわけではない、という診断に基づいて「科学の理論化にとっての不可欠性は必ずしも真理性を含意しない」（Maddy, 1992, 289）と主張し、不可欠性論証によって抽象的な数学的対象の存在へのコミットメントを導出するクワインの議論を批判している。<sup>5</sup>このマディの指摘が示唆しているのは、〈ある科学理論を受け入れる〉ということがそのまま〈その理論に含まれる全ての文を真と見なしている〉ということにはならないため、たとえある科学理論にとって数学が必須のものであることを認めたとしても、そのことだけから「その理論を受け入れる人は抽象的な数学的対象の存在にコミットしている」と言うことはできない、ということである。

以上、抽象的な数学的存在者に対する存在論的コミットメントを導出するクワインの議論と、現代におけるその評価について概観してきた。そして、

クワインの導出ステップのほとんど全てに対して代替案が提出されていることから、「クワインの分析は存在論を巡る現代の論争に大きな影響を及ぼしたものではあるが、その一方で、このクワインの見解が現代の存在論者達の標準の見解となっているわけではない」という本節冒頭で述べられた状況は十分に理解されるであろう。もちろん、ここで検討された事例は「不可欠性論証を介した抽象的対象へのコミットメントの導出とそれに対する代替案」という局所的な論争に関するものでしかないが、<sup>6</sup>上で挙げられたような様々な立場が存在することを見れば、現代における存在論の領域においては多くの立場が乱立しており論争状況が複雑化していることは十分に理解されよう。

さて、これまで概観されてきた存在論的論争には、注意を向けられるべき点が二つある。一つは、こういった論争は存在論に関わる論争ではあるものの、「どのような対象が存在するのか」という対象ないし存在者のレベルで直接議論を戦わせているわけではない、ということである。つまり、これらの論者は、「抽象的な数学的対象など存在しないに決まっているのだからクワインの見解は間違っている」と頭ごなしに主張しているわけではなく、抽象的な数学的対象に対する存在論的コミットメントを引き出すクワインの導出プロセスの一部に異議を申し立てることによって反論を展開しているのである。<sup>7</sup>注意されるべきもう一つの点は、上記の論者たちは確かに存在論を論ずるための枠組みをクワインと異なる仕方で提示してはいるのだが、その一方で、彼らがクワインと共有している点も存在する、ということである。それは、上述のステップ1、すなわち〈存在論は真と見なされている文から導出される〉という基本的な考えである。

これら二つの点を念頭に置きながら上述の存在論的論争における諸争点を再度振り返るならば、一つの構図が浮かび上がってくる。すなわち、少なくともここで取り上げられた存在論的論争に関して言えば、その争点は結局のところ〈存在論的コミットメントの導出元となる文集合はどれか〉および〈その文集合から存在論が導出される方法はどのようなものか〉という二つの論点によって整理できる、ということである。この区分をもとにしてこれまで述べられてきた争点を分類するならば、〈物理学から数学を除去する〉という路線を進むフィールドと、〈「我々の最善の科学」を構成するすべての文が存在論を導出する際に考慮されねばならないわけではない〉とするマディは前者の〈存在論的コミットメントの導出元となる文集合は何か〉という第一の問題圏において議論を展開していることになる。これに対し、数学的言明の真理性を受け入れる一方でそれを数学的存在者へのコミットメント



を持たない様相言明へとパラフレーズすることが可能であることを示唆するパトナム<sup>8</sup>、あるいは「不可欠性論証」ではなく「単称名辞の指示機能」を存在論的コミットメントの規準として設定する新フレーゲ主義者たちの議論は第二の問題圏に位置づけられるべきものとなるだろう。

こういった整理を踏まえるならば、ある特定の存在論的見解が導出されるまでの流れを次のような基本構図のもとで捉えることができ、この構図のもとで存在論に関わる様々な論争の争点を分類することができるようになるだろう。

【存在論的議論の基本構図】

存在論的コミットメントの導出元となる文集合(=真理)が特定される。

+

文から存在者が引き出される仕方(存在論的コミットメントの規準)を特定される。

↓

存在論(=存在者の目録)が作成される。

以下では、この基本構図の下で、物理主義の存在論的含意についての理解を深めていくことにする。

### 第3節 スーパーヴィーニエンス・テーゼとその存在論上の役割

第1節において述べたように、物理主義という立場の内容に関する基本的なイメージは「すべての事実は物理的事実である」というある程度共有された形で存在するものの、これは哲学的議論に耐えうるような厳密な定式化ではない。それゆえ、存在論をはじめとする様々な問題領域において物理主義の是非を論ずるためには、この立場に対して詳細な定式化を与えていかねばならないのだが、現在のところ、この問題に関して各論者間で統一された見解があるわけではない<sup>9</sup>。しかし、多様な定式化が存在する一方で、多くの論者が物理主義という立場の重要な一部として組み込んでいるテーゼがある。それは「非物理的な事実的性質は物理的性質にスーパーヴィーンする」という形で定式化されるスーパーヴィーニエンス・テーゼである(以下、SVテーゼと呼ぶ)。そこで、以下では、このSVテーゼが物理主義という立場の一部としてどのように機能するかを概観した上で、前節で提示した「存在論的議論の基本構図」の中にそれを位置づけることにより、物理主義の存在論的テーゼとしての内実の一端を明らかにすることを試みる。

まず、SVテーゼと物理主義の関係について見ていくことにしよう。スー

パーヴィーニエンス関係とは諸性質の間に成立する一般的な関係であり、たとえば「化学的な性質は物理的性質にスーパーヴィーンする」という言明が意味しているのは、「いかなる二つのシステムも、物理的性質において異なることなく化学的性質に関して異なることはありえない」あるいは「二つのシステムが物理的性質において同一であるならば、化学的性質においても同一でなければならない」ということである<sup>10</sup>。さて、このスーパーヴィーニエンス関係が成立しているところでは、非物理的な事実的性質に関するどんな差異の背後にも物理的性質の差異が存在することになり、また物理的性質における差異のないところにはいかなる非物理的で事実的な性質の差異もないことになるだろう。したがって、物理的性質にスーパーヴィーンするような非物理的性質を用いて記述される事態は、物理的性質に依存しそれに決定されているという意味において、物理的事実を超えるものではないと言える。それゆえ、そのような事態を〈事実〉として認めることは「全ての事実は物理的事実である」とする物理主義の基本理念に反しないのである。他方、物理的性質にスーパーヴィーンしない非物理的性質についてはどうか。この場合には、ある二つのシステムが物理的性質に関して全く同一であるにも関わらず何らかの非物理的性質において異なっている、ということがありうることになる。それゆえ、「物理的性質にスーパーヴィーンしない非物理的性質」を用いて記述される事態を〈事実〉として認めることは物理主義の基本理念に反することになるだろう。なぜなら、そのような事態を〈事実〉として認めるということは、物理的には全く同一であるような二つのシステムの間には何らかの事実的な差異があるということを経験するということであり、これはまさに「物理的でない何らかの事実」「物理的事実を超えた何らかの事実」の成立を認めることだからである。

したがって、「全ての事実は物理的事実である」という物理主義の基本理念の下では、「物理的性質にスーパーヴィーンする性質」によって記述される事態を〈事実〉として承認することはできるが、「物理的性質にスーパーヴィーンしない性質」によって記述される事態を〈事実〉として承認することはできない、と言うことができよう。このように、SVテーゼは物理主義という立場を構成する重要な一部であると考えられるのである。<sup>10</sup>そこで、本論の残りの部分では、物理主義の存在論的テーゼとしての内実を明らかにするための第一歩として、このSVテーゼに焦点を当てた検討を行っていくことにする。

さて、第2節で提示された「存在論的議論の基本構図」のなかでSVテーゼはどのように機能するだろうか。結論から先に述べるならば、「物理主義」



という立場がしばしば存在論的テーゼとして位置づけられるにも関わらず、その重要な一部をなすSVテーゼは、「存在者」そのものに直接関わるものというよりは、存在者についての見解が引き出されるべき「真理」や「事実」についてある種の制約を課すものとして理解されるべきだ、というのが本論の見解となる。以下では、この見解に至るまでの道筋を順に確認していくことにする。まず、SVテーゼの眼目がスーパーヴィーニエンス関係の成立を主張するところにあることからして、主張のポイントが「存在者の目録」を直接提示することによって存在論的な主張を行うところにあるわけではない、ということは明らかであろう。<sup>11</sup>したがって、物理主義が存在論的議論において主として機能する場面は、存在者の具体的な目録が導出される以前の二つのステップのいずれかである、と考えられることになる。そして、「事実を表すために用いられるいかなる性質も物理的性質にスーパーヴィーンする」という文言を見るならば、これが諸性質間の関係と事実性に言及するものであって「文の受容と存在者へのコミットメントとの関係」に関するいかなる言及も含んでいないことから、SVテーゼが機能する主要なフィールドが「存在論的コミットメントの規準を特定する」という場面ではないと考えられる。したがって、SVテーゼが存在論的議論において機能する主要な場面は「存在論的コミットメントの導出元となる文集合を特定する」という第一の問題圏であると推測されることになる。

それでは、SVテーゼは「存在論的コミットメントの導出元となる文集合の特定」というこの問題圏にどのような仕方に関わってくるのか。この点については、「事実を表すために用いられうるいかなる性質も物理的性質にスーパーヴィーンする」という定式化が「全ての事実は物理的事実である」という物理主義の基本イメージに対する部分的表現として捉えられていたことを想起することによって理解できよう。「全ての事実は物理的事実である」ということは、裏を返せば「物理的事実でないものは事実ではない」ということであり、物理的事実以外のものを事実の範囲から排除することを主張するものとして理解することができる。同様に、「事実を表すために用いられるいかなる性質も物理的性質にスーパーヴィーンする」という定式化も、「物理的性質にスーパーヴィーンしない性質は事実を表すものではない」という仕方（事実的でない性質）を選び分け、排除する規準として機能するのである。要するに、SVテーゼが述べているのは、「物理的性質にスーパーヴィーンしない性質」によって記述される事態は（事実）ではないということであり、それゆえ、そういった性質を表す述語を用いて構成される文は「存在論的コミットメントの導出元となる文集合」から排除される、とい

うことである。物理主義という存在論的立場の一部としてのSVテーゼの機能はこのような形で理解することができよう。

以上の検討により、SVテーゼが存在論に関する議論において直接的に関わってくるのは、「存在者」のレベルでも「存在論的コミットメントの規準」のレベルでもなく、「そこから存在論的コミットメントが導出されるべき文集合の特定」というレベルにおいてである、ということが確認された。しかし、このことが意味しているのは「SVテーゼは存在論的なテーゼではない」ということではない、というのも、第2節で見てきたように、存在論に関する議論においては、「何が存在するか」という対象ないし存在者のレベルでの直接的な主張ではないにも関わらず、存在論的見解に何らかの影響を持ちうる多くの主張があるからである。SVテーゼもまた、そういった主張の一つとして存在論という問題領域において重要な役割を果たしているのであり、この意味において「存在論的テーゼ」の一種と見なすことができるのである。<sup>12</sup>

他方で、SVテーゼを主張するだけでは十全な存在論的立場（存在者の目録）を提示したことにはならない、ということも同時に理解されるであろう。まず、SVテーゼそのものは「物理的性質」についていかなる規定も与えていないため、このテーゼを主張するだけでは「物理的性質にスーパーヴィーンしない性質は事実を表すものではない」という事実性規準に実体が与えられない。したがって、「物理的性質」についての何らかの規定とセットで考えられなければ、本論において提示された「存在論の基本構図」の第1の問題圏に限定してさえ、SVテーゼは十全な回答とはならないのである。<sup>13</sup> さらに、物理的性質に対する規定が何らかの仕方と与えられたとしても、それだけでは「存在者の目録」の十全な提示にはなお不十分である。というのも、SVテーゼの提示する事実性規準の実体を確定させ、それを用いて「存在論的コミットメントの導出元となる文集合」を確定させたとしても、存在論的コミットメントの規準が与えられなければ、そこからどのような「存在者の目録」が導出されるかが定まらないからである。

#### 第4節 まとめ

本論では、まず、存在論的議論の基本構図を「真なる文の特定+存在論的コミットメントの規準の特定→存在者の目録の特定」という仕方で提示した。（第2節）。続いて、物理主義という存在論的立場を構成する重要な部分としてのSVテーゼをこの基本構図に位置づけることにより、その存在論的な役割は第一の問題圏——「真なる文の特定」——における事実性判定基準と

しての機能にある，という分析を提示するに至った（第3節）．本論の議論は，「物理主義」という立場の存在論的含意の全貌を明らかにするものではないが，そのために有用と思われる一つの枠組みと手がかりを与えるものではあるだろう．また，物理主義を受容しない論者に対しても，「自身の存在論的立場がどの点において物理主義と相容れないのか」という相違点の所在を明確化するためのツールとして，本論の議論は貢献することができるのである．

## 注

1. [Putnam, 1983, 210]
2. この見解は [Putnam, 1967] において最初に提示されたものである．
3. 存在論における新フレーゲ主義の概要については [Eklund, 2006] を参照のこと．ここで新フレーゲ主義の立場と [Quine, 1953] において否定されたマク某 (McX) の立場との違いについて簡単に述べておこう．マク某は特に議論もせず（おそらく表層的な文法的区分だけから）「ベガス」を単称名辞として特徴づけるが，新フレーゲ主義の立場に立つ者は，あるものが単称名辞と見なされるための様々な規準を提出する（そのような規準を与える際の基本方針は，文に含まれるある構成要素が単称名辞である場合にのみ妥当となるような推論パターン群を特定する，というものである．[Wright, 1983, 57f] を参照せよ）．そして，そういった様々な規準を満たすものとして特徴づけられた単称名辞のうちに「ベガス」が含まれる場合にのみ，ベガスは存在することになるのである．したがって，もし「ベガス」が単称名辞でないならば，新フレーゲ主義者達は「ベガスは存在しない」と有意義に主張できることになるため，クワインを「単称名辞を除去した量化文への書き換え」へと向かわせた〈存在論的論争において否定の側が不利を被る〉という問題が単純に生ずるわけではないことになるのである．
4. [Field, 1980]．また以下の説明においては [戸田山, 1998] を一部参照した．
5. これはマディの不可欠性論証批判の一部にすぎない．全体としての彼女の議論は，不可欠性論証を「単純な不可欠性論証」と「穏健な不可欠性論証」の二つに分けた上で，前者を現実の数学的実践と合致しないという論拠によって否定する一方で，後者に対しては現実の科学的実践および数学的実践との合致という観点から妥当性を疑問視するという構造になっている．本文で取り上げられたのは「穏健な不可欠性論証」と科学的実践の間の整合性を疑問視する部分のみである．（他の部分については，マディの不適切な自然主義理解に基づくものであるという理由で割愛した）．
6. したがって，本論で取り上げられた諸論点によって存在論という問題領域の全てが網羅できると主張するつもりは毛頭ない．実際，本論が存在論を論ずる

際に基づく基本構図——存在論についての問いは「真なる文の特定」および「存在論的コミットメントの規準の特定」という二つの問題区分をふまえた上で行われるとする基本構図——にのらない存在論的議論の潮流が加地大介によって指摘されている。加地によれば、ダメットを典型とする言語哲学主導型のアプローチと自然主義者達の著作に見られる認識論主導型のアプローチに加え、近年では存在論主導型が存在論が勃興しつつあるというのである（加地はこのようなアプローチを「新アリストテレス主義的分析形而上学」と呼び、その特徴の一つを「言語や概念図式などの『私たち』の側の何かの探求として形而上学が研究されるのではなく、私たちから独立に存在しうる世界の基本構造についての研究として形而上学が遂行される」（加地，2004，168-9）という仕方と与えている）。筆者としては、こういったアプローチが（科学の範囲内における形而上学）としての物理主義と両立可能であるとは思わないが、少なくとも本論で扱っている議論が存在論をめぐる近年の膨大な議論の一部をカバーするものでしかない、という事実は記しておくかねばならない。しかし、このことは本論の目的にとっては問題とはならない。というのも、本論は存在論という問題領域全体のレビューをその目的の一つとして設定しているわけではなく、あくまで物理主義という存在論的オプションをどのような観点から論ずるべきかについての一つの視座を提示することを目指しているからである。そして、物理主義という「存在論的テーゼ」の中で重要な役割を果たしているスーパーヴィーニエンス・テーゼについて、その存在論的論争における役割を理解するためには、ここで提示された構図は十分に機能すると思われる。

7. むろん、これらの論者のうちには対象のレベルにおける何らかの信念（唯名論的直観など）を擁護することを目的として自説を展開している者もいるだろうが、問題は「背景的な動機」ではなく「公共の場で実際に展開されている議論」である。
8. ただし、[Putnam, 2004] において提示されている見解は、そういった書き換えのどちらが妥当であるかを判断できない以上、数学的对象が存在するか否かは規約の問題にすぎない、というものである。また、同書においてパトナムは第一の問題圏に関わる「概念的多元論」という見解を提出している。
9. 物理主義という立場に関する諸定式化間の相違を整理するにあたっては、まずこの立場を「いかなるものも物理的なもの以上のもではない」というルーズな仕方と理解した上で、「物理的」「以上のもではない」という二つの表現にどのような実質を与えるかに応じて分類を行う、というのが標準的な手法となっている。第1の論点に関しては、「物理的」という語を現在の物理学によって規定する路線、未来の理想的な物理学によって規定する路線、さらに「物理的」という語に関する我々の前理論的理解ないしアプリアリな規定によって部分的に規定しようとする路線などがある。他方、第2の論点については、「以上のもではない」というフレーズの意味合いを具体化するための道具立てとして、トークン同一性やタイプ同一性、スーパーヴィーニエンス関係

などが検討されている。物理主義の定式化を巡る論争状況の整理としては [Dowell, 2006a], [Ney, 2008] などを参照せよ。

10. スーパーヴィーニエンス関係の分類には通常「強い／弱い」および「個体的／領域的／全域的」といった区分が導入されるが、本論の論点には関わらないためここではとりあげない。
11. もちろん、SVテーゼを表す文そのものから何らかの存在論的含意——物理的性質なるものが存在する、など——を引き出すことは可能かもしれない。しかし、そういった含意を引き出すためには、少なくとも何らかの存在論的コミットメントの規準が設定されねばならない（ある人が受け入れている文のうちに「物理的性質」といった名辞が含まれているとしても、そのことだけでその人が物理的性質の存在にコミットしなければならないわけではない、という点については [Quine, 1953] の示す通りである）。したがって、SVテーゼを表現する文面に着目してみたところで、結局のところ、それが機能するのは「存在論的コミットメントが導出されるべき文集合の特定」というレベルでしかない、と行うことができるだろう。
12. したがって、([Quine, 1979] のような) SVテーゼのみによって物理主義という立場を特徴づける論者にとっても、物理主義の「存在論的テーゼとしての身分」は保持され続けることになる。
13. ただし、「物理的性質」の規定を与える際には、いわゆる「ヘンペルのジレンマ」——「物理的性質」を現在の物理学によって規定する「現在主義」の路線をとれば物理主義は偽になってしまい、未来の理想的な物理学によって規定する「未来主義」の路線をとれば物理主義は実質的内容の特定できない空虚な主張になってしまう、というジレンマ——を回避しなければならない。ちなみに、このジレンマへの対処としては、基本的には未来主義の立場を採りつつ、物理学という学問の特徴をより詳細に記述することで空虚性を回避しようとする路線 (cf. [Dowell, 2006b]) と、「物理的性質」の内容規定を物理学に全面的に委ねるのではなく「基本的な物理的性質のうちには心的性質は含まれない」といったアプリアリな規定を組み込むことによって空虚性を回避しようとする路線 (cf. [Wilson, 2006]) などが有望視されている。

なお、筆者自身の見解についていえば、実は、「物理主義の本当に正しい定式化」を巡る論争にはあまり意味はない、と考えている。物理主義を唯物論的立場の後裔と見なす論者にはWilson的な路線が説得的に見えるかもしれないが、(唯物論との連続性という歴史的観点を重視せず) 単純に現代物理学の包括性と説得性に立脚点をおいて物理主義を支持する論者にとっては、物理的性質について「アプリアリな制約」を課すことは物理学という学問の自律性に対する不当な介入と映るかもしれない。いずれにせよ、物理主義の定式化の適切性は、この立場をどの文脈において捉えるかによって異なりうるように思われるのである。この理解が正しければ、むしろ、どういった歴史的／論争的文脈の元でこの立場を捉えるかに応じて多様な物理主義「的」立場が存在すると

いうことを積極的に認め、その上で、それぞれの立場についてそこからの帰結や説得性を論ずる方がよほど生産的であると思われる（この点については [Ney, 2008] も見よ）。

## 文献

- Crane and Mellor, 1990: T. Crane and D. H. Mellor, "There is No Question of Physicalism," *Mind* 99
- Dowell, 2006a : J. L. Dowell. "Formulating the Thesis of Physicalism: an Introduction," *Philosophical Studies* 131
- Dowell, 2006b : J. L. Dowell. "The Physical: Empirical, Not Metaphysical," *Philosophical Studies* 131
- Ekulund, 2006: M, Eklund, "Neo-Fregean Ontology," *Philosophical Perspective* 20 (*Metaphysics*)
- Field, 1980: H. Field, *Science without Numbers: A Defence of Nominalism*, Oxford: Blackwell
- 加地, 2004 : 加地大介 「分析哲学における伝統的形而上学の復興」, 『現代思想』 Vol. 32-8, 青土社
- Kim, 1998: J. Kim, *Mind in a Physical World*, Cambridge U.P.
- Lewis, 1983: D. Lewis, "New Work for a Theory of Universals," *Australasian Journal of Philosophy*, 61/4
- Loewer, 2001: B. Loewer, "From Physics to Physicalism," in C. Gillett and B. Loewer (eds.), *Physicalism and its Discontents*, Cambridge U. P.
- Maddy, 1992: P. Maddy, "Indispensability Argument and Practice," *Journal of Philosophy* 89
- Ney, 2008: A. Ney, "Defining Physicalism," *Philosophy Compass* 3/5
- Putnam, 1967: H. Putnam, "Mathematics without Foundation," *Journal of Philosophy* 64 [邦訳: ヒラリー・パトナム 「基礎づけのいらない数学」 (戸田山和久訳), 飯田隆編 『リーディングス数学の哲学』, 勁草書房, 1995]
- Putnam, 1983: H. Putnam, "Why There isn't Ready Made World," in his *Realism and Reason*, Cambridge U. P. [邦訳: ヒラリー・パトナム 『实在論と理性』 (飯田隆他訳), 勁草書房, 1992]
- Putnam, 2004: H. Putnam, *Ethics without Ontology*, Harvard U. P. [邦訳: ヒラリー・パトナム 『存在論抜き倫理』 (関口浩喜他訳), 法政大学出版局, 2007]
- Quine, 1953: W. V. Quine, "On What There is," in his *From a Logical Point of View*, Harvard U. P. [邦訳: W. V. O. クワイン 「何があるのかについて」 『論理的観点から』 (飯田隆訳), 勁草書房, 1992]



- Quine, 1979: W. V. Quine, "Fact of the Matter," in R. Shahan and C. Swoyer, *Essays on the Philosophy of W. V. Quine*, Univ. of Oklahoma Press
- Stoljar, 2001: D. Stoljar, "Physicalism," in E. N. Zalta(ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* <<http://plato.stanford.edu/archives/fall2008/entries/physicalism/>>
- 戸田山, 1998 : 戸田山和久 「実り豊かなリサーチプログラムとしての物理主義的数学論」, 日本哲学会編 『哲學』 第49号
- 戸田山, 2003 : 戸田山和久 「哲学的自然主義の可能性」, 『思想』 No.948, 岩波書店
- Wilson, 2006: J. Wilson, "On Characterizing the Physical," *Philosophical Studies* 131
- Wright, 1983: C. Wright, *On Frege's Conception of Numbers as Objects*, Aberdeen U.P.  
(大阪大学)